

# 学長式辞

みなさん、おはようございます。学長の進士五十八です。

ただいま福井県立大学は、諸君らの入学を許可しました。私たち教職員一同は、諸君らの入学を心から歓迎し「入学おめでとう」と申し上げます。

COVID-19 感染症対策の完璧を期すべく、諸君らのスタートを共に祝いたいとお気持ちいっぱいの保護者の皆様には、Web でご参加いただく形とさせていただきます。この入学式には本学の設置者であります杉本達治福井県知事を唯一のご来賓としてお迎えしております。年度初めのご多用のなか、ご臨席賜り本当にありがとうございます。

この講堂とキャリアセンター前、池のほとりのシダレヤナギが芽吹き、かわいい桃の花が咲いているのに気づきましたか。福井県と中国浙江省の姉妹交流史は 30 年。2018 年浙江省立 5 大学の「植樹国際連帯事業交流団」50 名の学生が本学を訪れ、県大生と共に植樹したものです。

浙江省の省都は杭州市。900 年の昔、杭州の長官は蘇軾、詩人で有名な蘇東坡ですが、彼は杭州市街の西にある湖に泥が溜り、水深が浅くなって、たびたび水害をもたらすので、洪水対策として泥を浚渫し、その土で湖中に 5 里に及ぶ長い堤を築き対岸への近道とし、堤上には柳や桃を植え美しい風景に育てました。今では西湖十景で名高い景勝地は世界文化遺産

となり、西湖だけでも 3000 万の観光客を集めています。ただ洪水対策だけでなく、詩人が詩を詠み、画家が絵を描き、物語が出来ていくと、世界中からビジターを迎えることが可能だということです。蘇東坡の業績を讃えて「蘇堤」と呼ばれる西湖風景は、実は日本中の大名庭園のモデルともなっています。

ここから諸君らに、学んでほしいことがあります。「柳緑花紅、真面目」という蘇東坡の禅語です。柳は緑、花は紅。ごく当たり前ですがそれが真面目（しんめんもく）、「自然」、これこそが「真実」だ、ということです。

西湖の対岸には浄慈禅寺があり、永平寺開山の道元禅師ゆかりの禅寺でもあります。道元の道歌に「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪きえですずしかりけり」があります。春夏秋冬、花鳥風月の味わいと大自然には生命のリズムがある。生命あるものは一瞬の休みもなく生き続けているということです。私たちは今コロナ禍に対峙、ウィズコロナを模索していますが、人間もまた「自然」であり、「生命」です。私たちも、日々前進しなければなりません。

ですから私たち福井県立大学も前進し続けています。私たちは公立大学のミッションを「福井県の持続可能性を支える大学」でありたいとし、また高校生諸君の選択肢を広げることも考えて、昨春スタートの『創造農学科』、来春スタートの『先端増養殖科学科』、やがて恐竜王国・福井の研

究と人材育成、そして世界の恐竜研究拠点をめざす『(仮)恐竜学部』新設を目指しています。先生方もコロナ禍とはいえ、ZOOM授業の工夫、対面授業再開へ。また大学紀要の最新号をみると、人文科学、社会科学、自然科学編の3部門にわたり、前号の2倍の論文が掲載されています。紀要の黒田教授の教育心理学の論考が興味をひきました。進路指導と大学入学後の適応についてです。結論をいえば、知名度が高い、みんなが行くから、先生にすすめられたから・・・というグループと、自分で学びたいテーマがあって、この大学で、この先生につきたいのでというグループを比較すると、「自律的進学動機が入学後の適応状態を高める」ということのように。脳科学でも「押しつけられて学んだことより、自発的に学んだことの方が記憶され易い」し、そこからさらに興味が広がり創造力も生まれるといわれるのと同じことです。

大きな学びを得ようと諸君らは大学に進学しました。そういう諸君らには、本日只今から「人生の目標」をハッキリ自覚し、そして主体的・自律的に行動して欲しい。そう言いたいのです。

トーマス・リコーナは「人生の目標」は3つだといいます。

第一の目標は、自己の成熟を果すこと。私風に言えば、たくさんの読書や学習、体験を重ね、年齢にふさわしい成長をし、成熟していくこと。諸君らには香り高い人間をめざしてほしいと思います。

第二の目標は、他との愛のある関係を築くこと。私風には、知人・友人

から親友へ。将来のパートナーもあるかもしれません。たくさんの豊かな人間関係が持てる人生はほんとうに素晴らしいものです。

第三の目標は、地域貢献・社会貢献を果せるようになること。私風には、自分自身の成熟のみならず、他、そして地域・社会までも視野に入れて生きること。これこそ人間ならではの、人間らしい生き方といえると思います。

以上、諸君らにはコロナ禍であっても「人生の目標」を意識して、そして着実に前進してほしい。いつでも Do your Best！で。

さて最後になりますが、令和 3 年度入学式の特別講演について。本日は、東京大学名誉教授で、東京オリパラ・メインスタジアム国立競技場の設計者でもあり「ウッド・ファースト時代」を牽引していらっしゃる建築家の隈研吾先生をお迎えしています。隈先生はユニークかつ、私が考える本物の建築を世界中でたくさん制作しておられる世界的建築家です。現代建築の潮流はコンクリート、鉄、アルミ、ガラスといった無機物が支配的ですが、そんななか全国で知らないひとは皆無の「新国立競技場」で木材を、さらには土や石、水、緑など自然材を徹底的に生かす達人であり、さらにすすんで大地との調和。地域性・地方性を大切にしておられる稀有のアーキテクトでいらっしゃいます。

先生のご講演は、建築だけの問題ではありません。本日のテーマ「大都市への集中から、地方への分散へ」は、いま福井県が、いま日本が、いま世界が考えなければならない基本問題だといえます。アフターコロナのニューウェーブ。それは「地方の時代」。「地方移住・田園居住」志向への昂りです。集住・過密・三密のルツボ。それが大都市の魅力でした。ところがコロナ禍もあり多自然居住・田園居住への期待が増しています。

3、40年も前、経済学者の長洲一二先生が神奈川県知事に就かれ「地方の時代・文化の時代」を標榜されました。私は“神奈川県 naturally and culture を考える”という県の文化懇の委員として「かながわ風景づくり」を答申しました。自然に対する先人たちの働きかけ方が「文化」であり、その結果が風景を創ると考えたからです。

古来人類は、桃源郷、アルカディアに始まり、ドイツの国土美化運動、郷土愛護運動、そして日本でも新渡戸稲造の思想や大平正芳首相の田園国家構想まで、「田園居住志向の系譜」は連綿として存在しました。そんなことを思いながら隈先生の建築論、都市論を諸君らと共にしっかり拝聴したいと思います。こういう時代でこそ、真面目を見つめたいものです。以上、式辞といたします。

2021年4月7日 学長 進士五十八